

女子302

15 9

壺の夜

伊東 ←
廉

2

8/12

風が立つ夜店の老人が
 謎めいた言葉でぼくを呼び止めた
 不安な角度でさび色の壺が差し出された
 その壺が
 この机の上でどれ程の時を過ぎただろう
 ぼくの投げかけた
 インクの汚れや
 瞬折差される花の香りにむせても
 壺は形を薄くすることもなく
 その思いを
 蒼く傾りゆく
 夜の闇に流していたのだろう
 壺に架った南十字星が
 一つの星を欠いているのは
 遠い昔見捨てられた凄惨な戦線で